巻頭言

随 想

Essay

渡辺 勝也*

Katsuya WATANABE*

軽金属が巻頭言を継続的に各号に掲載しはじめたのは第26号（1976年）からで、以来3年間に約30編の巻頭言が、学・業界の錚々たる諸先輩から寄せられている。どの巻頭言も経験豊富で幾多の困難を克服してこられた優れた方々の筆になるものであるから会員諸氏は感銘深く読まれたことと思う。構造不況とか低成長などの言葉がすつかり耳になじんでしまった昨今だが、1973年秋の石油危機に端を発した経済混乱の中でのアルミニウム製錬界の破局的混迷が軽金属誌に巻頭言を載せるひとつの引金になったのであろう。日本のアルミニウム産業存亡の危機にあたつて軽金属学会が従来よりもさらに格段に高濃度で産業に貢献し危地を脱し洋々たる前途を拓きたいという願望あるいは使命感が学会の中にみなぎったであろうことが感じられる。軽金属学会の財政の相当の部分が軽金属協会に依存しており会員の払う学会費にのみ依存しているわけではない現状ではその当否はともかく業界の緊張がより直接的に学会に反映するのは当然である。昨年11月巻頭言の依頼を受けてからは特に以上の経緯が伏在したであろうことを想像し、それではどのようにそれが30編の巻頭言にあらわれているだろうかという目で振返ってみた。ご承知のようにすでに執筆された方々は斯界の大先輩で、わが国のアルミニウム工業と学会の発展に貢献してこられ、それゆえにアルミニウムの将来を憂うこともひとしおであろう方々である。多少手前勝手かもしれない憶測をもつて読みかえしてみると、新しい提案、気宇壮大な将来構想、歴史的変遷過程、ウィットに富んだ話など楽しみながら啓発されさすが大先輩の筆と感心させられ、今さらながら私ごときが小文をものする意欲もしおれてしまうが、共同研究の必要性を訴える巻頭言の比率が高く特に初期ほどそれが多。それはアルミニウム産業の立たされた状況を思えば無理からぬことで、効率の高い自主技術開発のための研究投資には共同で研究する必要がある、そのため軽金属業界が持っている企業間隔壁の排除が鉄鋼業界との対比も含めて強く指摘されている。企業間の閉鎖性については私は事情にうといので触れないことにして、ここではより一般的に研究の引出しということで日頃思うことを多少述べる。

大学や公的研究機関に所属する軽金属学会会員はその名簿から推定すると、おおよそ450名であるが、この会員がどの程度業界の抱えている問題について知っているのであろうか？ 軽金属学会としてはより一層積極的に軽金属の研究を活発にして業界の発展にも貢献していくためにはこの会員に注目する必要があると思う。この研究者（あるいはグループ）が研究目標を選定するには自分の従来からの蓄積の中から選ぶことが極めて多いと思われ、だから研究の蓄積は知識や技術や経験の集積のみが重要なのではなく将来の研究がかかつており、その中で研究者が育っていくから重要だと思う。この流れの中から

* 北海道大学（札幌市）。Hokkaido University (Sapporo).

枝を出したりさらに研究を深めたり応用に広げたりする目的で文献あさりをするのであつて文献あさりから研究が始まるのではないであろう。研究情報は非常に多くなりむしろ消化不良になる程であるがそれはすでに行なわれた研究の報告であつて、未踏の研究は探すのではなく察知するといえる。長年携わった分野であれば大略は承知しているから文献あさりもそれ程苦しくはないが、一步でも他分野に踏み込めば事情は一変するであろう。情報の中で組織化が欠けているのにいわゆる耳学問がありこれが馬鹿にならない力を発揮する。百聞は一見にしかずといわれてはいるが、まだ行なわれていないものは見ることは出来ず、耳は大いに使うべきであるし、軽金属の分野でいかなる研究が期待されているかを吹聴することは必要だと思う。

春秋の講演発表会や研究会など耳を多用する機会はもちろん多いけれども、これらも成果の発表である場合がほとんどであつてこれからの問題にはふれていないのが通例である。将来に向けて積極的にいかなる研究が待望されているかについて話し合う場を設ける主役は学会が最も適していると思う。各研究機関にはそれぞれの目的があり、各研究者には研究の自由があるので、自発性は当然尊重されなければならないけれども、研究の目的、背景などの意見交換があることによつて、それならばやってみようという研究者が出てくるであろう。下地づくりのない単なる寄せ集めの共同研究はおそらく永続性がなくおつき合いで終る場合が多いのではないだろうか。軽金属の研究を活発にして自主技術を開発し、日本の軽金属業界が発展していくための一基盤として軽金属研究者の層を厚くすることが必要で、それには軽金属を研究する人口の増加が必要であり、また研究すべき事項が多岐多彩である必要がある。軽金属の分野では省エネルギー製錬の研究だけが必要とされているのではなく、大きなことから小さなことまでどのようなことが研究を待っているのかを広く知つてもらふ意見交換は毎年必要とは思わないが、継続的に行ないまた何年か経過したときには過去の問題がどのようになつているかの確認も必要であろう。軽金属の研究・技術の進展にたいして軽金属学会がまとめ役として最も望ましいので近い機会にこのような企画を取り上げ、それが共同研究にまで発展し、ひいては軽金属技術の向上につながりユニークな日本独自の自主技術の花を咲かせたいものである。

話は一転するが、私の住む北海道の軽金属学会会員は16名である。面積は全国の約27%を占める北海道の人口は僅かに5%に過ぎずGNPはさらに低く2%にしか達していないので何とか会員人口をGNPに見合うまでに到達したいわけだが、16名という軽金属学会会員は全国の0.8%であつて、いかに比率が低いかおわかりいただければよい。赤道直下に産するボーキサイトからうまれるせいかなルミニウムは北海道を苦手としているようだ。日本軽金属が苫小牧に進出して来た時には転勤者が水盃をして渡道したという笑えない話をよく聞かされるが、私のような北海道育ちには想像できないことである。水盃で別れて来た方々がいざそこに定住してみて北海道は実によい所だと今になつて述べていることは道産子の私が保証するよりは学会長にでもおきき下さい。電力事情は全国的に見て特に好条件とおぼしい立地点はなくなり北海道の持つハンディは消滅しつつあり、また後進的であるだけに軽金属の収容の余力を充分に持っている。現在の北海道は19世紀のように水盃をして来る熊と鮭の土地ではなく美しい文明の花が21世紀に向けて咲き誇ろうとしている土地であることを再認識され鉄鋼の時代に続く軽金属の時代をここに開花させたいものである。